本論

目的

本論文においては、音韻障害を併せ持つ吃音児（吃+音児）の、(1) アセスメント及び指導経過における特徴、(2) 協調運動発達の特徴について、実験的、臨床的手法を併用することによって明らかにすることを論文の目的とする。

論文の構成

本論文は、第1部と第2部の2つの部分から構成される。

まず第1部では、前述したように吃+音児の非流暢性発話や音韻過程の継時的変化、認知、言語、運動などの発達の側面の特徴、吃音の悪化条件や維持条件などにみられる特徴についてこれまでほとんど検討がなされていないことから、音韻障害を併せ持つ吃音幼児のアセスメント及び指導経過全般にわたる特徴を検討することを目的に、吃+音児、吃+非音児、吃音を持たない音韻障害児（以下、非吃+音児）の発話（非流暢性発話、音韻過程）、発達スクリーニング検査の継時的変化について検討するとともに、吃+音児の臨床過程について報告する（研究1～4）。

続いて第2部では、第1部を通して吃+音児が有する特徴の1つとして示唆された協調運動の拙劣さに焦点をあて、吃+音児、吃+非音児、非吃音・非音韻障害児（非吃+非音児）の協調運動発達の特徴について Webster の提唱した I.I.M 及び Webster が I.I.M を検証する際に使用した諸課題を用いて検討するとともに、吃+音児に協調運動の向上に焦点をあてた指導を行い、その効果の検討を行う（研究5～8）。論文構成の全体図を表2に示す。

表 2.1-1　本論文の構成

第1部　音韻障害を併せ持つ吃音幼児のアセスメント及び指導経過における特徴の検討	
臨床的研究(アセスメント)	臨床的研究(指導)
研究 1　発吃 1 年未満の音韻障害を併せ持つ吃音児の非流暢生発話・音韻過程の特徴	研究 4　音韻障害を併せ持つ吃音児の治療過程の継時的追跡 I：　U 仮説に基づく検討
研究 2　発吃 1 年未満の音韻障害を併せ持つ吃音児の発達スクリーニング検査の結果の検討	
研究 3　音韻障害を併せ持つ吃音児の非流暢性発話・音韻過程・発達スクリーニング検査の結果の継時的変化の特徴	
第2部　音韻障害を併せ持つ吃音児の協調運動発達の特徴	
実験的研究	実験的研究(アセスメント、指導)
研究 5　音韻障害を併せ持つ吃音児の協調運動発達発達の特徴 I：連続的な運動表出能力の測定	研究 8　吃+音児に対する治療過程の継時的追跡 II：　協調運動スキルに焦点をあてた指導
研究 6　音韻障害を併せ持つ吃音児の協調運動発達の特徴 II：新規な運動表出能力の測定	
研究 7　音韻障害を併せ持つ吃音児の協調運動発達の特徴 III：大脳半球間の干渉に対する反応の測定	